研究ノート

異文化理解と留学について考える（１）
—ウォーリック大学に留学中の学生への聞き取りから—

近　藤　裕　子

１．はじめに

平成27、28年度の人間科学総合研究所の特別予算プロジェクト、「多文化理解と言語教育」にメンバーとして参加している。グローバル化が各方面においてすすめられている今日、異文化理解の重要性は増しているが、学生たちにとって、留学をさらに有益なものとするためには、どのような準備をさせるべきなのかという問題も、このプロジェクトでは扱っている。本稿は、その一環として平成27年10月27日、イギリス、ウォーリック大学で行った、アジア人留学生（１人はチリ）への聞き取り調査をまとめたものである。[1)]

２．調査の内容

調査は用紙への書き込み、またその後のフリートーキングの形式で行われた。記述を求めた質問と回答のまとめは以下のとおりである。

Q1.　What is your nationality? How long have you studied English?

出身国：中国（２名)、台湾（２名)、チリ、インドネシア、日本（２名）

英語学習歴：短くて10年、長い場合は22年。

１）この聞き取りは、応用言語学の大学院のコース（Dr. Ema Ushioda指導）に27年秋から入学した学生８名に対して行ったものである。始まってから約１カ月が経過した段階。エマ先生、また学生たちのご協力に改めて謝意を表したい。

Q2. Is this your first time to study abroad?

初めての留学と答えたのは２名。

留学経験のある学生が、これまでの留学先としてあげた国名は：カナダ、イギリス、オーストラリア、フィンランド。

学生の１人は、生まれてから８歳までアメリカとオーストラリアに暮らした経験あり。

Q3. Have you ever taken the TOEIC test, and what was the score?

受けたと答えた学生のうち、最低点820点、最高点950点。

Q4. Besides your native language and English, what language did you learn? And what is your level of that foreign language?

英語ほどはうまくないと答えたが、全員が第二外国語（第三外国語もと答えた学生は２名）を学んでいた。学習したとしてあげられたのは中国語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、フィンランド語、アラビア語。

Q5. In the future, would you like to have a job outside your country?

おそらくという回答も含めると全員が海外での仕事を希望した。

Q6. When you studied English, did your teacher use only English or use also your native language?

英語のみと答えたのは１名。母語のみ２名。英語と母語の両方と答えたのは５名。

Q7. Among the four skills of English; reading, listening, writing and speaking, did you find any difficulties with any of the skills when you came to the UK?

回答はwriting（４名）speaking（２名）listening（２名）

Q8. Before coming to the UK, did you have any chances to do presentation, discussion, or debate in English?

全員が経験ありと回答した。

Q9. When you become an English teacher, which skill will you emphasize at the very beginning; reading, speaking or grammar?

回答はreading（２名）speaking（６名）

Q10. In your opinion, what has to be prepared most, before a person studies abroad?

英語の能力を磨くこと以外では、コミュニケーションする勇気、カルチャーショックを受けないために、その国の文化的背景を知っておくこと、料理などの生活能力があげられた。

今回の聞き取りは不特定多数に対する無作為抽出のサンプル調査ではないが、英語教育の勉強をするため、修士課程への留学を志した学生たちなので、高い意識をもっていると考えられる。（エマ先生の指導が受けたくて、ウォーリックを選んだと答えた学生、すなわち留学の動機づけがはっきりしている人もいた。）

Q4の質問で全員が英語以外の外国語も勉強したと回答しているので、語学が得意、また語学に対して関心が高い学生たちと考えられる。また全員と話していて、いわゆる英語による会話の問題はなかったが、Q7の質問で、書くことに難しさを感じたと答えた学生が半数いた。（2名の日本からの留学生の回答は、writingとspeakingであった。）最終的には修士論文にいたる、さまざまな段階でのレポート（論文）をきちんとした英語で書く必要があるが、このことに全員が自信をもっているわけではないことを示している。話すことだけではなく、留学に際しては書く力の準備がかなり必要である。

Q5において全員が、母国以外での就職を考えていると答えたが、これはそれぞれの国の経済的な状況、若者の失業率の問題などが背景にある。これは現段階で扱うには大きすぎる問題である。ただ、海外での就職先を探す場合、その実現のためには、しっかりした英語力を磨くことは不可欠であり、留学の強い動機づけになっているといえる。

このとき出会った日本人の留学生の1人がこの（28年）7月、日本に一時帰国した。東洋大学を訪ねてきたので、改めていくつか聞き取りを行った。

1）イギリスで言われてわからなかったことはありますか？
　—ジョーク。コメディーなど、その背景を知らないと笑えない。
2）つらかったことは？
　—どこへ行ってもどこから来たの？と聞かれ、溶け込めない雰囲気を感じることが多かった。[2)]
3）イギリスへの留学で一番成長したと感じたことは？（この学生は学部生のときにも留学を経験している。）
　—受けとめる力。寛容さ。
4）もしも自分の妹や弟が留学するとしたら、何をアドバイスしますか？
　—黙っていてはダメなので、気後れしないようにとアドバイスする。

もちろん、留学先でのコミュニケーションのために語学力が必要であることは言うまでもないが、ウォーリックでのフリートーキングのときにも出ていた、料理などの生活能力、つまり自分で生活していくことができるという大前提、またその国の文化的な背景についての知識をもつことも留学には必要である。

2）この学生の友人でアメリカ出身の学生たちも、どこから来たのと聞かれることが多かったらしい。留学先がいわゆるロンドンなどの大都会ではなく小さな田舎町のせいもあるのでは？と筆者は考えている。この学生が学部生時代に留学したのはカナダであり、両国を比べての感想である。

３．現段階でのまとめ

英語で書く力を養うことの前提には、母語の書き言葉による表現能力の涵養がある。筆者は2002年度から一般教養の総合科目（「詩を楽しむ」）を担当しているが、毎回、出席カード裏に書いてもらう感想の日本語力が近年、落ちてきていることを強く認識している。2002年度、2007年度、2012年度で共通するテーマ（与謝野晶子）の回の感想を比較してみるとき、〈勉強になった。〉、〈おもしろかった。〉というような短文のみの感想（ツイート、ライン的な感想）が2012年度には見られる。出席カードの裏という限られたスペースにおいても6－7行で、中身のある感想、自分の意見をしっかり書ける学生の数が減少してきている。母語においてそうであるなら、外国語における自己表現力の涵養は難しい、と簡単に結論づけることはできないが、自分の感想や意見を言葉で構築する力を、どのように学生に学ばせるのかは大きな命題であると思われる。

東洋大学のあるクラスで留学生（院生）に、自国のことについて流暢な日本語で説明してもらったことがある。日本との違いに驚く学生も多かったが、質問を積極的にできる学生がいなかった。黙っている態度ではダメという学生の答えは先に紹介した通りであるが、しっかりした自己表現力を身につけさせるのには時間がかかる。ディベートやプレゼンテーションも大学に入る前の段階から行われるようになってきてはいるが、その学生の気質、個性とも深く関わる問題である。

今回の聞き取り調査には日本人以外の留学生も含まれていたが、留学の準備をどのように考えるのかについて、さまざまな示唆を与えられたように思う。留学に際しては、①語学力、②異文化理解の力（留学先の文化を理解するだけではなく、自国のことも伝えられることを含めて）、③生活する能力[3]、そして④自己表現力（話す力、書く力を含めて）[4]が重要な要素になると考えられる。これらを手掛かりに、教育現場でどのように学生の力を伸ばしていくかなどについて、さらに調査・検証をすすめていきたいと思う。

3）最近、海外でのテロの事例が増えているので、安全、自分の身を守ることに対する認識を含める。

4）いわゆるセンター入試の英語の改革案において、話す力、書く力をテストに取り入れることについての検討が始まっている。今後、大学入学前の教育現場において、これらの力（自己表現力）をどのように伸ばしていくか、さらなる議論が行われることになるであろう。